

# 經濟論叢

第十六卷 第二號

---

- 労働市場論なき賃金論……………岸本英太郎 1
- ブルック・ファーム……………穂積文雄 19
- イギリス革命における農業・  
土地問題分析の視角……………尾崎芳治 47
- 社会科学のひとつの立場……………出口勇藏 61
- 《記事》  
昭和三十五年度京都大学経済学会大会における公開講演  
および研究報告の要旨…………… 74
- 

昭和三十五年八月

京都大学経済學會

## ブルック・ファーム

穂積文雄

一九五九年、ドッグ・ウッドの花うつくしい晩春の一日、わたくしはハーバード大学より自動車を駈ってブルック・ファームをたづねた。一八四三年の三月、一少年が乗り合ひ馬車でポストンのブラトル・ストリート (Brattle Street) から、おなじく、ブルック・ファームに行つたときは、「九マイルの距離を、丘陵の起伏する田舎を通つて、マサチューセツツや東部諸州によくみかける石壁をめぐらしたきもちのよい農園や、よろいどをみどりいろにぬり、前面にささやかな花園をしつらへ、周囲には果樹や日よけの樹木が哨兵のようになつてゐるうつくしい白い家をすざて行つた」とあるが、そのような牧歌的なおもむきは、いまはない。わたくしの乗る自動車は、市中の垣々砥のごとき舗装路を走りつづけるばかり。それでも、行き交う車もようやくまばらになつたようにおもつて、行くての道路中央にひとつのインディケーターがたつてゐるのがみえた。白い板に黒い字で「ブルック・ファーム、一八四一年より一八四七年まで社会実験の場所、右へ」とあつたとおもう。指示どおりに行くことしばし、道の左側にエントランスを通じて、前とおなじようなインディケーターがみえる。ことなるところは「右へ」がなくな

らてゐるだけ。(Brook Farm/Scene of Social Experiment/1841-1847/and of Camp of Andrew 1861) 車を乗りいれると、なかは一望広漠たる原野。一条の舗装路がすつとくへに通じている。なおすすんで、ほどよいところに車をとめておりたつ。あたりに人かげはない。ただ晩春の斜陽がわたくしらと車のかげをながく路上にうつし、ここちよい微風が樹間をわたるのみ。閑寂そのものである。みわたせば、丘あり、谷あり、林あり、草原あり。はるか西をのぞめばチャールス河がしづかにながれている。その対岸は高くなつて、工場のような建物がみえる。河の手前、左方よりの大きな白い板のようなものは、いわゆるドライブ・イン (Drive in 野外映画場) とみうけられる。それにしても、このあたり一木一草もブルック・ファームのなごりをとどめるかとおもへば、なつかしき、いとどふかまるをおぼえる。あの石の上にはゼノビアがいくらいたこともあろうか。この樹の下ではホリングオースが涼をいれたでもあろうか。ホーソンのがぶ、どうをみつめてよろこんだのはかしのあたりではあるまいか。<sup>2)</sup> リブレイはテオドル・パーカー氏がたづねてくると談論二三時間におよぶも、なお足れりとせず、パーカー氏の去るにあたっておくつて行く。行くこと一マイルばかりにして引き返へす。すると今度はパーカー氏がリブレイについてくる。こうして、はなしに夢中の二人はおなじところを往復数回におよぶを常としたとつたへられるが、それはあのあたりでもあつたであろうか。低徊願望すれば、想念はつきからつきへとつづいてとどまるところをしらぬ。いつしか、わたしは、百十数年の時のへだたりをとびこえてしまう。わたくしのまふたにはありし日の風景がうかびあがる。

ニュー・イングランドの夜があける。黎明のひかりが、ここ、ブルック・ファームにさしそめる。午前五時にさきだつことしばし。つ、の、ぶ、えの音があたりのしじまをやぶつてひびきわたる。それにこたえるかのごとく犬がけた

たましくはえまわる。その方に、むけるめに、ふるい百姓家がうつる。うつくしいオールド・ニュー・イングランド  
家屋のひとつ。ひろいホールが一方のはしから他方のはしまでつらぬいている。そのいづれものほしにドアがある。  
なかに入ると、ホールの左側に二階に通ずる階段がある。二階のまどによつてそとをながめると、家の南側に農場  
とひろい牧場がみえる。家の正面のドアを排してそとに出ると、前方に馬車道がある。木の垣と、桑とはりもみの  
なみ木が二つのどてをかこんでいる。どては牧場の小川の方へとくだつてゐる。どての上には瀧木のしげみと花壇が  
ある。一〇ヤードばかりいつたところに、優雅なこれの木が一本立つてゐる。そのそばに門があり、ガーデンヤ  
ームに通じてゐる。家の背面にはふたつの翼が建て増されてゐる。その階下はものおき小屋と馬車部屋になつて  
ゐる。東に面して大きな納屋がある。石柱の上に建てられてゐる。その南側がひろい裏庭 (barnyard) にひら  
いてゐる。家と納屋の間には馬車道があり、構内に通じてゐる。

台所は食堂のすぐ背後にある。皿のがちゃがちゃいう音がきこえる。そのそとを数人のひとびとがあちこちと  
うごきまわつてゐる。

たれか納屋で家畜の世話をしてゐる。防水用のタールをひいたむぎわら帽子をかぶり、青いろをした農夫の、  
わぎをきてゐる。うわぎは牛皮の靴の上部にたれかぶさつてゐる。よくみると、リプレイ氏である。五時半、ふた  
たびつ、ぶえの音がひびきわたる。また犬がおきでてほえたてる。くろい犬である。そのこえはかなしげであり、  
音楽的である。だがつ、ぶえと調和しない。やがて、ひとびとが他の建物からぞろぞろと朝食をたべにやつてくる。  
ひとびとは、病気でないかぎり、みな、この百姓家の食堂で食事をするのである。服装がすこし風がわりでお  
もしろい。ちよつと絵のような衣装——男は青い、わぎ (tunic) に黒い革帯をしめ、ひげをいっばいはやしてい

る。それは当時はそののちにおけるほど普通ではなかった。わかい婦人はつばのひろい帽子をかぶり、髪を優雅にたらしめている。学生や寄宿者 (boarders) はいろいろ、まちまちのきものをきている——がひとめをひく。

ながい、てんじょうのひくい食堂には食卓が何列もならんでいる。六列もあろうか。そのおのおのに平均一四人かける。白くぬつたベンチが椅子の代用をしている。食卓の上には白い食器がそなへられている。白い湯のみ (mug) がコップとグラスの両用をかねる。白いテーブル・クロスがかかっている。なにかも清潔である。ちりひとつない。

部屋のおくにリブレイ氏がかける。百姓着はぬいで、さっぱりと身だしなみをして、にこにこわらっている。眼のひかりがめがねの金のふちに反射するようにみえる。かれの右側にはかれの夫人がかける。そのそばに、かれの妹がかける。かの女は朝の茶かコーヒーをつぐ。学生の大部分はこの食卓につく。リブレイ夫人はたけが高く、優雅できゃしゃである。かの女の夫と同様近視眼であるが、なにか遠くのひとまたはものをみようとするとき、ときとして金ぶちのめがねをかけるだけである。食卓の料理はあっさりしたものである。上等のパン、それに農場からもってきたバターがおかれてゐる。わかい子供のなかからえらばれたかわい給仕たちがこまめにうごきまわる。年かさの青年が指揮している。かれが給仕隊をつくったチャールズ・ダナ (Charles A. Dana) であらう。給仕たちの食事はさめぬようにとくにあたためてある。みわたしたところ、食事はあじけないものでもなければ、かたくなるしいものでもない。がやがやと、たのしげなむだばなしが、はづむ<sup>10)</sup>。まことにたのしいひとときである。ユーモアが出る。ウィットがとぶ。ナンセンスがかわされる<sup>11)</sup>。

農場の一番高いところに立つてみれば、農場はうつくしいアムヒセアターをなして、周囲を丘陵でかこまれてい

る。宛然一幅のうつくしい絵である。かしこには林檎の果樹園がある。路傍のあちこちには日よけの樹木が立っている。耕地がある。つぎはつぎのようである。そこでは家庭用のとうもろこしや野菜が栽培されている。そのあるものは丘の南面を占めている。また、あるものは、くぼ地の中にある。正面にひろい牧場がある。きもちのよいみどりの海のように、はるかかなたまでひろがっている。

さきの建物、あのふるい百姓家——それは「ハイヴ」(Hive)というかわいいな名でよばれている。いみじくもつけたものである——から馬車道が他の建物に通じている。その道はほとんど牧場のレールまでくだって行って、ふたたびのぼるところでピルグリム・ハウス (Pilgrim House) に達する。それがいちばんとおい建物である。そこから道は転じて高みにのぼり、のこりの他の建物——コッチェジ (Cottage) とバイリー (Byry) にむかう。ピルグリム・ハウスはもと、最初の所有者の名によってモートン・ハウス (Morton House) とよばれていたが、のちになって、名をあらためてこうよばれるにいたつたものである。<sup>13)</sup> それは長方形で玄関の両側に室のある建物である (an oblong double house)。みはらしのよいところにある。白い簡素な家で、装飾はない。当時のニュー・イングランドのたいていの田舎家とおなじように、がっちりとしたつくりである。周囲に樹木がない。ここではもつとも魅力のない建物である。<sup>14)</sup>

コッチェジは十字架の形をしており、四つのきりづま (gables) がある。やはり簡素である。教室が六つばかりある。この建物は褐色にぬつてある。それはちいさなまるい丘 (a little knoll) の上にあつて、背部に花壇がある。ぐるっと芝生にとりまかれてゐる。

ハイヴのかなた、ハイヴにもつともちかく、この領域の中央にアイリー (Byry) がある。(Byry はリブレイ氏

のかきかたである。あるものは Eyrie とかき、またあるものは Aerie ともいふ。<sup>16)</sup>この建物の土台は、プディング・グ・ストーン (Pudding-stone) といふロックスマスリー壑岩 (Roxbury conglomerate) の岩棚 (ledge) である。まさに、バイブルのことばをそのまま「岩の上に建てられた家」(built his house upon a rock)<sup>17)</sup>である。そして、みどりのテラスが二段になってそれをきつきあげている。いちばん高く、いちばんみことな位置を占め、樅と楓の森を背にして、果樹園にのぞみ、眺望絶佳である。それは正方形のひらたい木造で、うすいはいろがかかった沙岩 (a light gray, sandstone color) にぬつてある。なめらかなつぎ板 (smooth, matched boards) をもちひ、おおきな、ひらたいし、かば、び (cornice) や び、び、び (Fange) が頂上のあたりのところにめぐらされている。それで、あまりにも簡素にすぎることを見ぬがれている。それでも、それは、みるめ、にきもちがよい。そして、ひくいフレンチまどがある。それは上段のテラスにむかつてドアのようにひらく。

内部をうかがうと、かずかずの絵画が四方のかべをかざり、しだのおしは、(pressed fern leaves) がだんろだ、な (mantel) のつばに、いっばいあり、去年の秋の葉のかがやかしいなごりがかべのそこかしこにとどめられているのがみえる。そこには、また、ピアノもある。その上に油絵がかかっている。その反対の側にはリブレイ氏の書籍がつつしりとならんでいる。それはライブラリーである。ドイツ書が多い。とくにリブレイ氏の編纂になる一四冊そろいの「外国文学範例」(Specimens of Foreign Literature) が異彩をはなっている。<sup>18)</sup>このライブラリーは、もとハイヴの四壁にオーブンの書架にのせてならべられていたもので、イギリス、フランス、ドイツの奇観書に富み、リブレイ氏のものである。アイリーが建つてからライブラリーはこのあたらしい建物にうつされたが、書物は、従前どおり、みなに解放されている。そのことはリブレイ氏の寛容を示すものでなければならぬ。<sup>19)</sup>

これらの建物はハイヴから約四分の一マイルほどはなれており、おたがいの間は数百ヤードある。<sup>20)</sup>ブルック・ファームの中心はハイヴである。<sup>21)</sup>ここでみなが食事をとることはすでにみたところのごとくであるが、そこは、したがって、また、社交の場であり、活潑なたのしい生活 (the busy, active, happy life) が展開する。これに反し、アイリーはい、こいとリクリエーションの場である。<sup>22)</sup>ここでは音楽の夕べがもたれたり、ダンスがおこなわれる。コッテッジには、主としてちいさい子供たちのための、教室がある。ビルグリム・ハウスは、おもに、家族もちの宿舎にあてられている。<sup>24)</sup>

さて、食事は半時間ばかりでおわる。<sup>25)</sup>みなは、それぞれ、そのいとなみにむかう。

コッテッジではわかい子供たちのクラスがはじまる。コッテッジはここでもっともうつくしいたてものであるから、それにはいちばんむいている。というのは、わかい心性 (mind) はそのうつくしいことの印象をうけ、授業もうけやすいとかがへられるし、それに、あらゆる手段をもちいで訓育 (school discipline) の時間を快適ならしめ、生徒をして、訓育が愉快なリクリエーションではないということをおすれしめねばならぬ、という意見がおこなわれているからである。<sup>26)</sup>

牛小屋ではプロング (prong) フォーク状のもの (が四つづいていて、普通ダング・フォーク (dung-fork) とよばれる肥料かきをもって肥料車に肥料をつみこんでいるものがある。あちらではポテトを植えているものがある。こちらではえんどう、うまめを植えているものがある。そうかとおもうと、せつせと、小牛のために藁と乾草をきざむに余念ないひとのすがたもみえる。<sup>27)</sup>いづれも、まだ、しろうとくさいところがある。それはおおえない。しかし、たれもかも、みな熱心である。一生懸命にやっている。それに、とてもたのしそうである。なかにひとり師匠



格に見えるものがある。あれがリブレイ夫人がドワイト氏 (Mr. John Sullivan Dwight) 氏への手紙の中で、「なんでもござるてゐる」(Knows how to do every thing) とたたえたウイリアム・アレン (William Allen) ホーソンのブライスデール・ロマンス (Bithedale Romance) の中でサイラス (Silas Foster) であらう。あめりかいことに、みながこのように、はたらいでゐるのに、まどから、ぼんやりとながめてゐるものもいる。そうかとおもうと、かなた、牧場のふちにそうて、カウ・アイランド (Cow Island) の方へゆうゆうと散歩してゐるものもいる。とにかく、ここには、命令・支配・隷属といったものは、ほとんど、みられない。<sup>32)</sup>

やがて、日午にあたる。一二時半になる。すると、ふたたび、つ、ぶえがなる。昼食のしらせである。ひとびとは、ハイヴにあつまつてくる。のらから、教室から、納屋から。<sup>33)</sup> 昼食がすめば、また、それぞれのいとなみがはじまる。こんどは子供たちも、それぞれ、その力に応じた労働に従事してゐるのがみかけられる。おとなにまじつてのらしごにはげんでゐるものもある。<sup>34)</sup> 花園のしごとに熱中してゐるものもある。うさぎにえさをやつてゐるものもある。みな、たのしげに、はたらいでゐる。自然の魅力にひかれ、好奇心にかられ、おもしろくてたまらぬといつたようすが、よくわかる。<sup>35)</sup> ときのたつにも気がつかぬようである。しかし、ときはたつ。日は西にうすづいて、かれらの影をながく地上にひく。ねぐらにいそぐ鳥のこえもしきりとなる。そして、時計の針は五時をまわつてなかにいたる。すると、また、つ、ぶえがひびきわたる。夕食のときをつげるあいづなのである。<sup>37)</sup> ひととは、みな、しごとをやめて、ハイヴにあつまる。食堂は、にぎやかになる。例によつて、わかい給仕たちが、せわしく、うごきまわる。御馳走がたくさんでゐる。ポイルド・ビーフ、ヴェジエタブルズ、グレイナム・ブレッド (Graham bread)、上質のバター、インディアン・プディング (Indian pudding) 等。<sup>38)</sup> 談笑がわきあがる。室内に和氣がみなぎる。

テーブルをへだててのたのしい応酬がはじまる。そのくちばやなやりとりの中にこめられた含蓄のひらめきは、他人には、その意味がつかめない。ブルック・ファームの会話の中にとけこむのは、門外漢には、まったく、むづかしいことである。そして、そこには、また、貴族的な雰囲気もただよっているのを感じないではいられない。<sup>39)</sup>だが、「そこには証券市場や財産づくり、乃至、財産ふやしのために心身を消耗しつくして、疲労困憊、意気消沈、家に帰って来ても、ふきげん、失望のあまり、ものもいわぬ男子は、ひとりもない。そこには、フランス衣装や、レースや、ダイヤモンドで、ひととほりあう婦人は、ひとりもない。みんな、じぶんたちは、ただじぶんたち自身の故に尊敬されていることを知っている。そのことが、いつそう、めいめいの内にある個性をひきだす。だから、これだけのひとをそろへて、しかも、そのおのおのが、それぞれに、なんらかの、とくべつの魅力(charm)をもっているということは、とても、よそでは、みられぬところである。<sup>40)</sup>

夕食がおわれれば、まづは自由の時間になる。ひとびとは、一日のじごとより解放せられて、おのおのそのこのむところにしたがうのである。それでは、いかにあるであろうか。しばらく、かれらのなすところをみよう。あるへやに、ひとがあつまっている。いってみると、談話討論の会がひらかれている。問題は「衝動」(Impulse)である。それについてはなしあっている。座には三〇人ほどいる。ちようど、ころあいのサークルである。あくびするものはひとりもない。ただ好奇心にかられただけできたものがないからであろう。三十歳あまりのうつくしい婦人がはなしている。よくみれば有名なフラー女史(Miss. Margaret Fuller)である。例によって、自然(Nature)をたたへ、「精神」(Spirit)は自然を通じて高揚するのであって、自然にとつてかわるのではない。「...the spirit ascending through, not superseding, nature.」と述べている。かの女は、感性(Sense)、智性(Int-

lected)、精神をはかりにかけて、智性を強調している。けだし、こよい、ここにつどへるひとびとは、どちらかといへば、智性をかるんじるかたむきがみえるからであろう。やがて、美の性質についてはなしに花がさく。<sup>42)</sup>

そこをあとにしてそとにでる。ブルグリン・ハウスのホールにあかりが、あかあかとついている。いつてみる。いまやダンスがたけなわである。うつくしいダンスである。ひとりの青年のそばにわかい女性がたっている。ダンスにくわわらないで、しきりと、かたわらの椅子にかけている、いまひとりの、女性とはなしながら、ひとのおどるのをながめている。くだんの青年が室をよこぎって行ったとおもうと、椅子を一脚もつてきて、じぶんのそばにおき、その、たっているわかい女性にすすめる。そのわかい女性がかれの親切を感じたのがわかる。三人は、ダンスがおわるまで、いっしよに、そこにかけていた。ダンスがおわつて、かの女がかへるうと、かれば「おやすみ」(“Good Night”)とあいさつした。そのとき、かの女は、かれのはおえみを天上のものともみた。時計の針はいま一一時半をさしている。<sup>43)</sup>

夜もようやくふけた。ブルック・ファームは、しずかないこいに入つた。すべては闇のとばりにおおわれてしまつた。まぶたにうかんだ情景は消えさる。ブルグリン・ハウスもない。ハイヴもない。コッテッジもみえない。アイルリーもみえない。リブレイ氏もいない。フリー女史もいない。たくさんわかい男女もすがたをけしてしまつた。気がついてみると、わたくしは、ようやく、うすづく斜陽を浴びて立っている。みえるものは広漠たる原野、きこえるものは樹林をわたるかぜのそよぎ。わたくしは唐詩選の句が口をついて出るのをどうすることもできない。

今年花落ち顔色改まる

明年花開くも復た誰か存らん。

己に見る松枯擗けて薪と為るを  
更に開く桑田莖して海と成るを。  
古人復た落城の東に無く  
今人廻って対す落花の風。  
年年歳歳花相似たり  
歳歳年年人同じからず。

それは、そのまま、このとき、このところにおける、わたくしの心算、感懐にはかならない。

悵然として仰げば無心の白雲が悠悠として天空を過ぎ行く。喟然として俯せば、チャールズ河が静に樹影をうつしている。わたくしは

間雲影日に悠悠

物換り星移り幾秋をか度れる

と、くちずきみなから家路についた。

- (1) John Thomas Codman, *Brook Farm, Historic and Personal Memoirs*, Boston: Arena, 1894, p. 46.
- (2) Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks*, edited by Randall Stewart, New Haven: Yale, 1932, p. 75.
- (3) Ora Gannett Sedgwick, "A Girl of Sixteen at Brook Farm," *Atlantic Monthly*, LXXXV (1890), 397.
- (4) A Letter from Sophia Eastman to Mehitable Eastman (to be found in *Autobiography of Brook Farm*, edited by Henry W. Sams, University of Chicago, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice-Hall, Inc., 1958, p. 80.), and(7)

- (5) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 395 :
- (6) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 47.
- (7) Arthur Sumner, "A Boy's Recollections of Brook Farm," *New England Magazine*, X, New Series (March-August, 1894) (to be found in the above mentioned *Autobiography of Brook Farm*, p. 242.)
- (8) John Thomas Codman, *ibid.*, pp. 47-48.
- (9) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 396.
- (10) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 49.
- (11) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 396.
- (12) John Thomas Codman, *ibid.*, pp. 49-50.
- (13) Henry W. Sams, *ibid.*, p. 112, Foot Note, 13.
- (14) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 50.
- (15) Ora Gannett Sedgwick *ibid.*, 398.
- (16) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 50.
- (17) *The New Testament, The Gospel according to St. Matthew*, Chapter 7, 24.
- (18) John Thomas Codman, *ibid.*, pp. 50-51.
- (19) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 395.
- (20) Arthur Sumner, *ibid.*, p. 312.
- (21) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 395, Arthur Sumner, *ibid.*, p. 312.
- (22) Ora Gannett, *ibid.*, 400.
- (23) *ibid.*, 398.
- (24) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 51.
- (25) Marianne Dwight, *Letters from Brook Farm 1844-1847*, edited by Amy L. Reed, Poughkeepsie, N, Y.; Vassar

- College, 1928, p. 7.
- ㉔ Amelia Russell, "Home Life of the Brook Farm Association," *Atlantic Monthly*, XLII (July-December, 1878) 562.
- ㉕ Letter from Nathaniel Hawthorne to Louisa Hawthorne (to be seen in the above mentioned *Autobiography of Brook Farm*, p. 18.)
- ㉖ *ibid.*, Zoltan Haraszti, *The Idyll of Brook Farm*, Boston: public Library, 1937, P, 18.
- ㉗ Nathaniel Hawthorne, *Bliethdale Romance*,
- ㉘ R. W. Emerson, Historic Notes of Life and Letters in New England (*Complete Wopks of Ralph Waldo Emerson*, ed. by E. W. Emerson, Boston: Houghton Mifflin Company, 1904, X, p. 367.)
- ㉙ Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks*, *ibid.*, p. 75.
- ㉚ R. W. Emerson, *ibid.*, pp. 367-368.
- ㉛ Above mentioned Letter written by Sophia Eastman, (*Autobyography of Brook Farm*, p. 80), Marianne Dewight, *ibid.*, pp. 7-8.
- ㉜ See (27.)
- ㉝ John Van Der Zee Sears, *My Friends at Brook Farm*, New York: Desmond Fitzgerald, 1912. p. 68.
- ㉞ Arthur Sumner, *ibid.* 311.
- ㉟ Marianne Dwight. *ibid.*, P.8
- ㊱ John Van Der Zee Sears, *ibid.*, p. 66.
- ㊲ *ibid.* pp. 51-52.
- ㊳ See (4)
- ㊴ Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 397.
- ㊵ Margaret Fuller's journals in R. W. Emerson, and J. F. Clarke, *Memoirs of Margaret Fuller Ossoli*, 3 volumes, London: Richard Bentley, 1852, II, p. 273.

③ Marianne Devight, *ibid.*, pp. 46-47.

## 二

右はブルック・ファームのある日の状景である。ブルック・ファームのある日の状景はそれが晴天の日であるか雨天の日であるかによつて、ちがひがあろう。また、春夏秋冬、季節によつて変化がみられるであらう。さらに、ブルック・ファームは七年間存続し、その間変遷なきを得なかつた。その初期と晩年では状景は、かならずしも、おなじとはいへない。これは、比較的初期・晩春・晴天のある日のつもりである。しかし、これにより、他の日を類推することはさまたげないであらう。なお、ここにあらわれる状景は単なる空想の産物ではない。みな事實にもとづく。しかも、ドッキュメンツのうらづけがある。煩をいとはず註を付したのは、それをあきらかにするためにほかならない。ペダントのひそみにならうつもりでは、もうとうない。ただし、つぎのことをことわっておかなければならない。ひとびとの行動はすべて同一の日のこととしてあつかわれているが、それは、かならずしもそうではないということである。それでは事實とはいへないではないかといわれるかも知れない。そういわれれば、そのとおりである。わたくしは、それをみとめるにやぶさかなものではない。しかし、わたくしの意図はある一日を究明考証することにあるのではない。ブルック・ファームの生熊をうかがうにあるのである。ブルック・ファームでは毎日がどのようにすごされていたかをあきらかにしようとするにある。そのアトモスヘアを感じとることにするのである。それが、ねらひなのである。しかも、それを、確実なドッキュメンツにもとづいて達成しようとするのである。そのためには、そういうあつかいも、いまの、わたくしとしては、やむを得ないとしてゆるされてよか

ろうかとおもう。けだし、その場合、ある特定の一日だけの記録によるときは、その一日の状況は内容がきわめて空虚になることをまぬがれない。それではわたくしの意図を実現することはおぼつかない。それに、わたくしの右に述べたような意図を実現するためだけなら、そうあつかうことがなんらかのさまたげとなるとはかんがへられない。わたくしはそうかんがへる。それだからである。

それにしても、わたくしは、なんのためにブルック・ファームの生態をうかがおうとするのか。なにゆえにブルック・ファームで毎日がいかにすごされていたかをあきらかにしようとするのか。また、なぜならば、そのノットモスヘアを感じしとろうとするか。もとより、それは、それ自体において意味のあることであろう。それはそれ自身として興味なしとしなくてもあろう。それはそうにちがいない。すくなくとも、わたくしは、それを肯定することができる。しかしながら、わたくしにとつては、それが問題のすべてではない。と、いうよりも、それ自身が問題なのではない。そういつた方が、より適切であろう。わたくしにとつて問題なのはこのようなブルック・ファームがいかにあらわれ、いかにうつり、いかにほろびたかである。ことばをかえていえば、その生成、推移、消滅これがわたくしの問題なのである。しかるに、それらを追究するためには、まづ、その生態をとらえることが必要である。すくなくとも、それが無意味でないことはたしかである。わたくしは、そうかんがへる。しかるに、ブルック・ファームはすでにきえさつている。いまはない。したがって、その生態は、いまにおいてたづねるよしもない。しかし、国は破れても山河はこのころ。ブルック・ファームはすでにないとはいっても、そのあととはのこつている。そのあとに立てば、それだけブルック・ファームの生態への近接が可能となるであろう。わたくしは、そうおもつたかくて、わたくしはブルック・ファームをたづねた。そして、わたくしは、はからずも、ブルック・ファームの生



態をまふたにとらへた。そういうしだいである。わたくしは、これより、すすんで、本題に入らう。わたくしは、まづ、ブルック・ファームの生成をうかがうであらう。

ブルック・ファームはいかにあらわれたか。その生成はいかにあつたか。ブルック・ファームはひとつのユートピアの実現・実践の運動である。したがつて、ブルック・ファームはいかにあわれたか、ブルック・ファームの生成はいかにあつたかの追究は、まづ、ユートピアの実現・実践の運動はいかにあらわれるか、その生成はいかにあるかの究明にはじまらねばならない。それでは、ユートピアの実現・実践の運動は、いかにあらわれるか、その生成はいかにあるか。それについては、わたくしは、かつて、いささか、私見を述べたことがある<sup>2)</sup>。それで、ここには、それをくりかえすことをさける。ここでは、社会の矛盾・欠陥がユートピアを生ぜしめ、矛盾・欠陥の重庄の増大と、ユートピアの現実への近接が、ユートピアの実現・実践の運動をうながすといふにとどめる。

つぎに、ブルック・ファームは近世のアメリカにおけるユートピアの実現・実践の運動のひとつである。だから、ブルック・ファームがいかにあらわれたか、その生成はいかにあつたかの追究は、近世アメリカにおけるユートピアの実現・実践の運動はいかにあつたか、その生成はいかにあつたか、の解明を要求する。すくなくとも、それを重要ならずとしない。それでは近世アメリカにおけるユートピアの実現・実践の運動はいかにあらわれたか、その生成はいかにあつたか。ところが、それについても、わたくしは、すでに述べたことがある<sup>3)</sup>。それで、あらためて、ここに、述べることをひかえる。ここでは、ただ、つぎのことを指摘するにとどめる。新大陸は旧大陸のひとつの、に希望の天地とうつつた。かれらはアトランチックのかなたに社会的理想が実現できるとかんがえた。そこにユ-

トピアの花をさかせ、実をむすばしめるに適した土壌をみだした。まづ、信仰の自由をもとめるひとたちが、ユートピアを展開した。ついで、インダストリアリゼーションの圧力がユートピアを簇生せしめた。

そして、ここでは、フォーカスをブルック・ファームにあわそう。

十九世紀に入るとアメリカにおしよせるインダストリアリゼーションの浪がようやくたかまる。自由の天地はその自由の故に、たつ浪も、ひとしお、はげしい。かくて、自由は自由を圧迫する。インダストリアリゼーションにともなう階級分裂の緩和、以前、じぶんのみせとく、いをもつていた職人が、かつていだいていた労働の尊厳性の回復、いまや生産手段の所有よりきりはなされた賃労働者の地位の向上が、ようやく重大な問題として、社会の前面にかびあがってくる。しかも、一八三七年の金融恐慌、その翌年夏の広汎な旱魃、それにつづく冬季の未曾有の酷寒、これらが相合して、右の事情を強化する。それは、それに対する反応を、すくなくとも、二つの方面に生ぜしめずにおかなかつた。そのひとつの方面は労働者階級である。けれど、かれらは、直接に、その影響をうける立場にある。そして、それだけに、その反応は大きい。それは当時における労働運動において展開した。わたくしは、いま、それについて具体的に述べるといふとまがない。わたくしは、それをアメリカ経済史、乃至、アメリカにおける労働運動史の記述にゆずる。いま、ひとつの方面は知識階級である。けれど、知識階級は、かならずしも、その影響を直接にはうけないかもしれない。しかしながら、かれらは、その知性の故に、その矛盾、欠陥を、敏感に感受する。その知性は理想をいだかしめる。理想は改革を志向せしめる。そして、そこに、ユートピアの実現・実践の運動がおこりうる。それはあやしむにあたらない。いわんや、シェーカー、ラパイツ、ロバート・オーエン等、ユートピアの先蹤が、すでにちかかくにあるにおいて、それは、なおさらでなければならぬ。一八四〇年代、

アメリカにおいて、ユートピアの一大ブームの出現をみる所以である。

しかるに、アメリカにおいても、ニュー・イングランドにおいては、これにくわえるに、さらに、ふたつの事情があつたことをわすれてはならない。それは、当時の、ニュー・イングランドの特質と、そこにおける知識階級の間になぎれる思潮である。

「一九世紀の初期におけるニュー・イングランドは」とチャールス・エリオット・ノートンはいう。「住むによき地であつた。住むとは、まだ、まばらであつた。大きな都会はなかつた。もつとも大きなボストンでも、人口は、かろうじて、二五十万、住民は同種、純粹のイギリス系で、主として農夫と舟乗り。かれらは知能あり、勤勉で、宗教心あつく、かれらの間には大きな平等性があつた。大富家もなければ、極貧者もなく、たれも安業にくらしてゐた。もつともまづしいものといえども、圧迫や飢餓のおそれから自由であつた (free from the fear of oppression or starvation)。ひととひとのあいだからは自然であり、友好的であつた。生活の一般的な習慣は簡素・儉約であつた。しかし、どんなちいさな町でも、たいてい、洗練の、教養の、さらには適度のしかし純性を優雅の、伝統的な模範 (traditional standard of refinement, of intellectual culture, and even of a moderate though genuine elegance)。を保持してゐる家庭がなんけんかあつたものである。これ以上真実にデモクラチックな社会 (community) は、いまだ、かつて、なかつたし、デモクラチックの原理に基礎をおいた社会 (society) の利点と機<sup>オポチュニティ</sup> 会がより充分にかつ自由に享受された社会も、いまだ、かつて、なかつた。その利害関係は比較的せまく、大きな人類の生活に貢献することはちいさかつた。それは、そのとおりである。それは、過去のおもにを相続することがあまりないようにみえた。そして、それにちがいはない、とするも、それは、また、民族の尊い家宝の多くの

ものわけ、ま、え、からも、たたれている。だが、しかしながら、それは、そのことを、あまり、重要視しなかった。それは、みづからを、旧世界より解放し、独立の精神 (spirit of independence) をいだいていた。それは、自信にみち、希望をもって将来を築しみにして待ち受けた。その希望は、もつとも賢明なひとにも不条理とはおもわれなかった。ここでは、ひとには、旧来の陋習や特権にわずらわされることなく、どれだけのことをなしうるかをしめすべき、自由な舞台があった。そして、ここでは、とくにニュー・イングランドにあつては、正義に基礎をおいた社会のあたらしい秩序が、史上にその比をみないみごとな成果を約束するのみでなく、また、すでに現実の成果を示して祝福をうけていた。それはまさにきたるべきものの先蹤にすぎなかった。その社会の全氣質が楽天的・友愛的となり、初期のカルヴィンの教理のむかしの峻厳さが弛緩し、そして、この世とあの世がユートピアの様相をおびるにいたるのは、ふしぎではない。

繁栄の危険、限度をしらぬデモクラシーの危険、無制限な移民より生ずる危険、は、まだ、予見せられていなかった。それらの危険は、しだいに、そのすがたをあらわすはずであった。一八三〇年以前にそだったジェネレーションはそれらの危険について、経験もなければ、恐怖もなかった。

王室の知事バルチャー (the Royal Governor Belcher) が、『世界の異様な一隅』 (“the uncouth corner of the world”) とよんだところのものにおけるこの社会状態……<sup>5)</sup>

このようなところに、右のような事情がおきるとき、それが、その、ひとびとに、あたえる影響は、さらに、いつそう、はなはだしいものがなければならぬ。それはみやすいところといつて、よからう。

また、一九世紀のなかばよりすこし前、異常な知的感情の浪 (an extraordinary wave of intellectual feeling)<sup>6)</sup>

がアメリカにおこつた。その中心はニュー・イングランド地方であつた。それはシュツルム・ウント・ドランクであつた。いわゆる、トランセンデンタリズム (Transcendentalism) がそれである。

トランセンデンタリズムは、もと、ユニタリアン (Unitarian) による「<sup>リテラリ</sup>ピューリタニズム (Puritanism) への反動」よりおこる。ニュー・イングランドはビルグルム・ファーズが、メイフラワー号 (Mayflower) よりの第一歩を印したところ。もと、ピューリタンの地である。カルヴィニストの地である。カルヴィニズムは峻厳をきわめるをもつて知られる。しかしながら、ものきわまれば変ずる。それは万有の通則である。その通則のあらわれを、ここにおいてはトランセンデンタリズムにおいてみるといおうか。そもそも、ユニタリアニズムは信仰の一派である。それは一つの人格における神の觀念 (a conception of God in one person) の上に立ち、三つの人格における神の觀念 (a conception of God in three persons) のうち一つのトリニタリアニズム (Trinitarianism) と対立する。その思想を源流遠くさかのぼり行けば初期キリスト教会に達するという。しかしながら、今日のユニタリアニズムはその起源を宗教改革 (Reformation) の時代にもつ。それは、ヨーロッパにおいては、各地における指導者によりてそだてられ、ひろめられてきた。アメリカにおいては、それはニュー・イングランドにおけるコングリゲーションナル・チャーチ (Congregational Church) の内よりうまれ出た。ニュー・イングランドにおけるコングリゲーションナリストの自由派が、しだいに結合して行き、ついに、一八一五年、保守派よりユニタリアンの名をうけるにいたつたのである。ユニタリアニズムは、もと、「自然における神の内在」 (Immanence of God in the nature) を説くが、この教理がニュー・イングランドに入るにおよんで、個人主義、自恃を信ずる一の神秘主義思想に展開した。それは、当時のヨーロッパにおける、とくにイギリス・ドイツにおける、哲学や文学の思想の動きやオリエ

ントの宗教思想によって強化され、宗教においてはトリニタリアニズム (Trinitarianism) を排し、原罪にあまみせず、アダムの子たることをやめて神の愛児となり、自己の内の聖なる性質に調和せる生を送らんとする。かれらはマインドとスピリチュアルな自由を謳歌して人間に必要なのは自己の内にあるもの、神に到るにプリーチャーズの必要なしと信ずる。さらに、かれらの指導者の中には労働を尊重するものもあり、知識と労働の合一をとく。いわく、知識人も労働せよ、労働者には知識をあたえよ、知識人が労働するとき、労働者は間暇を得、したがって知識をおさめることができる。

かれらはグループをなし、ボストン・カンカルドにおいて、しきりに相会し、このあたらしい思想を談じてうむところをしらず、時人かれらを称してトランセンデタリスト・クラブ (Transcendentalist Club) とす。ヘマーソン (Ralph Waldo Emerson)、ヘッジ (F. H. Hedge)、リップレイ (George Ripley)、アルcott (Bronson Alcott)、フーラー (Margaret Fuller)、パーカー (Theodore Parker) 等比々みなこれに属す。

ブルック・ファームは、実にかかるアトモスヘアの中から生まれ出たのである。その主唱者はジョージ・リップレイである。そのことは、ブルック・ファームが、はじめ、リプレイス・ファーム (Ripley's Farm) と称されていたことによつてもうかがうことができる。

ジョージ・リップレイ (一八〇二—一八八〇) はマサチューセッツのグリーンフィールド (Greenfield in Mass.) のひと、一八二三年ハーバード大学を卒業、一八二六年ボストンにおいて、ユニタリアンの牧師 (Unitarian ministry) となる。かくて、在職約一五年、その間、パーチェス・ストリート、ンサイエチー (Purchase street Society) の牧師 (pastor) としてコンミュニチーの知的、精神的向上のための努力において、同僚の活潑かつ有能な協力者で

あつた。<sup>8)</sup>かれは、またボストンにおいて一の学校をひらいた。その学校は一九世紀の四〇年代、第一流の名声を博したとつたへられてゐる。<sup>9)</sup>そこには、遠くマニラより、はるばる笈を負うて、来り学んだものさえあることが、あきらかにされている。<sup>10)</sup>さて、かれは一八四一年、惜しまれて牧師の職を辞し、ブルック・ファームの経営に入る。しからば、いづごろからブルック・ファームの構想をもつにいたつたものであろうか。ブルック・ファームの構想は、すでにふれたごとく、また、のちにあきらかとなるがごとく、一のユートピアのカテゴリーに属する。かれがブルック・ファームのユートピアよりも以前になんらかのユートピアの思想をいだいたか、どうか。もし、いざいたすれば、それはいづごろからのことか。そして、それはいかにあつたか。それらについては、いまのわたくしは、なんともいえない。しかしながら、ブルック・ファームのユートピアの構想に關するかぎり、それは一八四〇年の秋ごろからはじまつたものといつてよからうとおもう。それが、そのころ、かれの胸中であつたことは、そのころ、ボストンやカンカドで、よく、かれらの会合において、それが話題となつてゐることよりして、あきらかである。<sup>11)</sup>そして、そのことは、今日のことである。今日のこつてゐるかれらの間に交わされた書簡が、証明してくれる。それが、そのころにはじまるということ、つぎの二つのことより推定することができよう。その一つ。フリー女史が一八四〇年十月二八日付の手紙の中において、

市でリブレイ夫妻にお目にかかりました。リ氏は、ますます、かれの新計画に夢中になりました。かれはあまりに業親的で、  
事物を胸中でゆっくり、熟せしめることをしません……<sup>12)</sup>

とかいてゐる。ここで、新計画といい、また胸中でゆっくり熟せしめないといふことは、それが、リブレイの胸中にこのころに生じたものであることをうかがわしむるものでなければならぬであらう。いま一つ。リブレイ夫妻

は一八四〇年の夏をブルック・ファームで過ごしている。そして、それは、かれらにとって非常に楽しかったようである。そのことは、その当時一八四〇年八月一日の日づけでリブレイ夫人がブルック・ファームより、ドワイト (John S. Dwight) へあてて、つぎのごとくかいているによつて、あきらかであると、いつてよかろう。

われわれのファームはたのしい場所です……この静穏なひきこもり所において、わたくしは、どこかで、わたしをまちうけていてくれるとおもっていた、世事よりの完全な隔離と精神の安息をみいだしました。……鳥と樹木、なだらかに傾斜するみどりの丘、そして、めのとどくかぎりどこまでもつづくほしくきのはたけ——それから、わがまどのむこうがわのしげみにおおわれたみどりなす岸の下の清い流れの小川がわがいこいにはしつかなるし、らべをかなで、とよさかのぼる朝日には朝の歌をうたいます。ここにては夢のような日が多いです——牧場のそぞろあるき、ちかくのみどりなる丘の上のくるみの木蔭によこたわりてのまどろみ、さては、しろい小馬にのつての、ちかくにいと多いみどりのこみちや道路のなんマイルも、なんマイルもの騎行、……<sup>13)</sup>

そして、ブルック・ファームがかれらの気に入ったことがかれらのブルック・ファームの計画と無関係でないとかんがえるのはむりではあるまい。そうだとすれば、ブルック・ファームの計画がうまれるのはその夏以前ではあり得ない。その秋ごろということになる。あるいは、この夏にかれら夫妻の間に、それについてはなしが、とさにおこつたことが、ありうるとかんがえてもよいのではなからうか。

そして、そのはなしにあづかつたものには、リブレイ夫人や、妹ソファイヤ・リブレイはもとより、エマーソン、フラー、アルコット等をおこつたことができる。ナサニエル・ホーソンもそのうちに入れてさしつかえあるまい。そして、そのほかに、たくさんあつたことはうたがない。ただその名を記録によりて確実にあげることがむづかしいというだけである。



つぎに、それでは、そのエートピアの構想そのものはいかにあつたであらうか。それについては、できれば、リブレイみづからをしてかたらしめるにしくはない。ところが、リブレイは理論的にはあまり述べていないらしい。しかしながら、一八四〇年秋十一月九日一書をエマーソンによせて、その計画への加入を勧誘している。そして、それにおいて、わたくしは、かれの構想の基本がよくうかがえるようにおもう。それで、いささか長きに失するきらいなしとしないがあえてかかげよう。もつとも、直接には、いま、ここで問題とするとところに關係ないようにおもわれる箇所があるかも知れないが、それでも、それは当時の事情をあきらかにする役割をはたしうるとかんがえられる。それで割愛することをせず、あえて全文をかかげることにする。

押啓、カンカルドでのわれわれの会談で、わたくしが設立したいとおもっているアッソシエーションの理念をあなたが完全に理解されたようには、どうも、かんがえられませんか。いま、われわれは、はやい時期に、それを実行にうつしたいとおもいますので、あなたの御支援、御協力の恩恵に浴するに足るものでありますか、どうか、について、あなたが御決定をくだされるのにやくだつため、より明確な計画を提供して、あなたの御判断を仰ぎたいと存じます。

御承知のごとく、われわれの目的は、いまよりも、より自然な知的な労働と手の労働の結合 (a more natural union between intellectual and manual labor) を保証し、同一人の内にある、かんがえるひと、はたらくひと、とを、できるだけ、むすびつけ、すべてのひとに、その趣味と才能に適應した労働をあたえ、そうして、かれらの勤勞の産果をかれらに確保することによって、最高の精神的自由を保障し、教育の恩恵と労働の利得を、すべてのひとに開放することによって、精神的奉仕の必要を排拒し、かくて、自由な、知的な、そして、教養のあるひとびとの社会、そこでは、ひとびと相互の關係は、われわれの競争制度の圧力の中においておくりうるよりも、より單純にして、健全な生活を可能ならしめるような、社会を提供するにあるのであります。

これらの目的を達成するために、われわれの企図するところは、ガーデンとファームを結合し、たくみに耕作すれば、すべて

の家族の生活資料をみたくに充分であるような、一小区域の土地を取得すること、これにくわえるに、学校 (school or college) をもつてすることで、その学校においては初歩の基本より最高の教養にいたるまで、もつとも完全な教育をさづけけます。われわれのファームは、そこに住む人種を改良する場となるであります。思想は労働の作用を支配するであります。そして労働は思想の発展に寄与するであります。われわれは勤労するも、苦役なく、真の平等を享受して、しかも、俗悪におちいることはないことを確信いたします。

ニートン (Newton)、ウエスト・ロックスベリ、およびデダムの、<sup>ボウゲイ</sup>境界にある、うつくしい地所を、きわめて妥当な条件で、われわれに提供しようという申し出でなされていきます。その土地は、わたくしは此復、しばらく、そこに住んだことがあるので、よく、しっています。これにまさる土地は、さがしても、得られるものではありません。われわれは現在のところ、三・四の家族が、来年の四月のはじめに、引越し、農場の耕作と家屋の建築にあたり、秋には、さらに、できるだけ多くのひとを受け入れる準備をなし、かくて、インスチチューションを、ともかく、実行に入ることができるかぎりの簡素なしかたで、また、最小の人数で、開始するつもりであります。だから参加希望者全部を抱擁するのは、すくなくとも、二三年後のことになりましょう。われわれは、みずからのおもさによって、崩解してはなりません。われわれは徐々に成長して、つよくならなければなりません。そうすれば、われわれの実験に、われわれの加入してもらいたいと、ねがっているひとびとを、みんな引きつけることに、成功するであります。

現在における急務は、必要な資金を獲得することにあります。現在われわれはプランを修正しましたので、カンカルドの論議の際にはなされたよりは、ずっとすくない額ですみます。あのときは、われわれは五〇、〇〇〇ドルいるとおもいました。周密な計算の結果、現在、われわれは三〇、〇〇〇ドルあれば、地所と十家族のための建物を購入し、一年間の作業を遂行するに必要な剰余が出ることを判明しました。

われわれは、この額を株式会社に対する出資方法により、インスチチューションの友人の間で調達する計画であります。出資者に対しては、一定利子の支払を保証し、出資金そのものに対する担保には不<sup>リジナル・エス</sup>不動産をあてます。そうすれば、たれも損失の危険はありません。かれは、他の投資から得るとおなじ、充分な利子をうけとるであります。同時に、他方においては、一つのインスチチューションに貢献しつつあるのであります。そして、そこには、貨幣の真の使用の保持、その悪用の追放があ

ります。必要な額が富裕な資本家からくるはずはありません。かれらの本能は鑄貨コイネのかかる使用に抗議します。それは、われわれの理念に共鳴し、その実現を、みづからの協同によってではないまでも、かれらの貨幣によって、援助することをよろこぶひとびとから得られねばなりません。あてにすることのできることもおまわれる出資が若干あります。われわれの間で、われわれは、おそらく、一〇、〇〇〇ドルつくることができましょう。残余の額は、加盟する意志の有無にかかわらず、われわれに好意をもつひとびとの出資にまたねばなりません。

かくも、もろもろの神聖な理念を實行するに適したプランを、わたくしは、このほかに想定することができません。もし賢明に遂行せられるならば、それはこの国、この時代、を光被することでしょう。たとい日の出とまでは行かなくとも、黎明の星ではあるでありましょう。われわれはなんらかの、かくのごとき、機オポチュニテイ構ストラクチャーをもたねばなりません。より不徹底な変革は無益であります。一個の実際家であるわたくしには、それは火をみるよりもあきらかであります。わたくしは労働の神ゴッド性を信じます。わたくしは「わたくしの肉と血を土地から糞り入れる」ことをねがいます。しかしながら、そのためには、わたくしは孤立してはたらし、不利にあまんずるか、あるいは、階級をことにし、ほとんど友人とすることのできないや、とい人の奉仕サービスを利用するか、そのいづれかをえらばねばなりません。なぜなら、わたくしは、じぶんににぎるく、わを他人にふるわさねばならないから。石灰のおけをわたくしの草の上にはばかりあけることは、わたくしには、できません。わたくしは教育ある友人たちが、はたらき、かんがえ、生活し、各人が全体の利益に最大の貢献をする競争のほかは、なんらの競争をしない社会をみたいとねがいます。

個人的には、わたくしの趣味と習性は、わたくしを他の方向にみちびくでしょう。わたくしは世間とそこに住むひとびとよりの高踏に情熱をたぎらします。それを、現在提供されている土地において、わたくしは容易に行うことができます。その土地をわたくしは賃借することができます。そして、そのことは、わたくしの他の資源と相まって、わたくしの個人的利害の関るかぎりでは、わたくしを、きわめて快適な状態におくであります。わたくしは、きつと、わたくしだけの、ささやかな神の都をもつ。そして、つごうよく行けば (please God)、いつかは、わたくしのくるまを駈カって市場に行き、青物をうりたいたいとおもいます。しかしながら、わたくしは、大なる社会善の前には、このような、じぶんひとりだけの感情は犠牲に供しなければならぬと感じています。わたくしは、あなたの御意見がうけたまわりたいです。あなたの御決意は、高い希望をみたすは、まさにこのときにあるか、あるいは、また、このしごと、は将来に属するかという問題について、わたくしの解決に資するところ大なるも

のがあるでありましょう。いま、さいなきは、すべてよい。いろいろの才能を打って一丸として事にあたる用意がととのつています。すべてのものは、われわれが、まぎに起つて、きづくべきことを指示しています。われわれにして、もし、この機会を逃がさんか、不眠のネメシス (unsleeping Nemesis) は、われわれから、われわれのもとめる恩恵をうばいとるでありましょう。ひとほしらず、わたくしとしましては、それについて、これほどかんがえることが二度とできないことはたしかであります。わたくしのころは他の目的にしたがうにちがいありません。そして、わたくしは、かくもうるわしきひかりが消えたことをなげきつつ、運命にあまんじるであります。このたびの選挙のばかさわぎで、つまらなく蕩尽されている富の、ほんのわづかばかりでも、一軒の家の礎石をおくことができるのです。そしてその家は遠からずして、諸国民の願望となるのです。

わたくしは、われわれの友人である「實際的キリスト者」(“Practical Christians”) がかれらの「規準」(“Standards”) —— 文書—— すなわち、規定の標準 (a prescribed standard) の作成を主張するということをいうのを、ほとんど、わすれるところでした。このためかれらは分離しました。おそらく、われわれは、かれらがいない方がよいでしょう。かれらは善良なひとたちです。かれらには、われわれの調味 (seasoning) に必要なしおがあります。しかしながら、かれらの理念に適従するには、われわれは、あまりに自由であり、あまりに抱擁力に富み、あまりに教養の美に愛着するものであります。かれらのかわりに、われわれは S・G・メイ (S. G. May) 氏から一人乃至二人の「實際家」(“Practical Men”) の応募を受けています。メイ氏はかれ自身この提案に関心をもち、いづれ参加したい意向であります。どうか、わたくしが、あなたに對しなしたと同様虚心恒懐、御意見をおきかせください。そして、わたくしが相変らずあなたの友人であり、忠実な僕であることをお信じてください。

ジョージ・リプレイ

二伸、わたくしは、このくわだての現段階においては、いかなる提案も、義務をとまなうものとかんがえられることはないということを付言しなければなりません。われわれが知りたいとおもうことは、ただ、ほんとにあてにすることができるところのものだけであります。ただし、いかなる誓約も、アッソシエーションの規約がみな同意を得るまでは、承認されません。

わたくしは、あなたが、もし、なかまのただししいるしに確信がもてれば冒険に乗り出してもよい、といわれたことを、おもい出します。これについて、わたくしは、うかがわせていただきたい。われわれのアッソシエーションはいろいろな階級のひとびとから構成せられてはならないかどうか。もし、われわれに、愛し愛される友人があり、われわれの個人的同情はつよくはな

いが、その一般の理念がわれわれのものと同じし、その才能・能力がわれらの奉仕を重要なものとするならば、それらのひとひと、ようこんで合併するべきものと、わたたくしはかんがえます。たとえは、わたたくしは、わたたくしの教区のひとりの善良な洗濯婦がこのくわだてにはらざるのをよみておもうたりたりとのおみせす。かの女は、たしかに、ミネルンでもなければ、ヴィーナスでもありません。しかし、われわれは、かの女のあたりのこと、おた教育をほどこして知識をおたせ、いろいろの素養を身につけてやうたいとおもいます。われわれが、<sup>15)</sup>とめおいてほしうとを、おつる若干の農夫たまたむつら、をなごらとがうかす。

(未完)

- (1) フルック・ファームは、本来、地名である。しかし、ここには、そこをもちてられた、社会をさすものとす。
- (2) 拙稿「トートマンのつご、経済論叢・第八五巻・第六号(昭和三五・六) 同上。
- (3) 同上。
- (4) For example, Chester Whitney Wright, *Economic History of the United States* New York, 1949, pp. 339-343. George Soule, *Economic Forces in American History*, 1952, pp. 165-169.
- (5) Charles Eliot Norton, L. L. D., "Henry Wadsworth Longfellow" (to be found in *The Poetical Works of Longfellow*, Ward, Lock & Co., Limited, London and Melbourne, P. v.)
- (6) Lafadio Hearn, *A History of English Literature*, Tokyo, 1927, Vol. II, P. 893. ("Notes on American Literature.")
- (7) Henry W. Sams, *Autobiography of Brook Farm*, p. 1.
- (8) "Rev. George Ripley," *The Monthly Miscellany of Religion and Letters*, May 1841, p. 293. (see Henry W. Sams, *ibid.*, p. 16)
- (9) John Van Der Zee Sears, *ibid.*, p. 54. <sup>10)</sup> *ibid.*
- (10) For example, see Henry W. Sams, *ibid.*, pp. 4 (no. 3), 5 (no. 4) etc.
- (11) T. W. Higginson, *Margaret Fuller Ossoli*, Boston: Houghton Mifflin Co., 1884, p. 180. (see, Henry W. Sams, *ibid.*, p.5 (no. 4))
- (12) See Henry W. Sams, *ibid.*, p. 3 (no. 1) <sup>11)</sup> *ibid.*, p. 1.
- (13) O. B. Frothingham, *George Ripley*, Boston: Houghton Mifflin Co., 1882, pp. 307-312.